

英雄物語ではない市井の物語

郝景芳著／及川茜訳
郝景芳短篇集



四六判 258頁
白水社
[本体 2,400円 + 税]

立原 透耶

中華圏のSF、特に中国大陆のSFが世界的に花開いていく印象が強い昨今だが、突然このようなブームになったわけではない。最初に飛び抜けた才能でSF世界をあっと言わせたのは、華僑のテッド・チャン（一九六七）である。寡作ではあるが、言語学や物理学などを混合させた知的で質の高い作品は幾度となく大きな賞を獲得している。二〇一八年には日本でも公開されヒットした映画「メッセージ」（あなたの人生の物語）ハヤカワ文庫、二〇〇三年）が有名。中華圏では憧れのSF作家として特別な位置にいる彼だが、両親が中国人で、アメリカに移民したのちに誕生したため、現在では中国語が全くできないとのこと、英語で執筆しており、作品にも特別に濃厚な中華風味というものは感じられない。

このテッド・チャンに続いたのが、今を時めくケン・リュウ

ウ（一九七六）である。弁護士でコンピュータープログラマーでもある彼は、創作においても数々の世界的な賞を総なめにしただけでなく、中国SFを英語に翻訳し世界中に広めた立役者でもある。彼の創作作品には中華圏やアジア、日本などの文化が色濃く表れており、これは意識してシノワリズムを描いているのが伝わってくる。実際に、いわゆる「シルク・パンク」という新ジャンルを確立したのも彼である。「これは古代中国の文化が新たな形で発展した世界を描く」もので、例えば三国時代の竹文化などが独自の発展を遂げて科学と結びついた世界を描いたりしている。ケン・リュウも両親がアメリカに移住した、いわゆる二世になるが、彼の場合は中国で生まれ育ち、子供の時にアメリカに渡ったせい、中国語も英語も堪能である。むしろ両言語に対する類まれなる

言語能力ゆえに、英語での創作も、中国語の翻訳も傑出した結果を次々と生み出している。ケン・リュウによって世界デビューした中国SF作家は少なくないが、中でも最初に脚光を浴びたのは陳楸帆（スタンリー・チェン）で、彼の『麗江の魚』（早川書房「SFマガジン」二〇一七年）は世界的なファンタジー小説の翻訳大賞を受賞した。そして満を辞しての『三体』第一部（劉慈欣）のヒューゴー賞（世界大SF大賞の一つ）受賞である。アジア人で初、翻訳物で初の受賞となった本作品は世界中で大ブームになり、ケン・リュウの英訳版を元に様々な言語で翻訳出版された。このことにより、中国にも里帰りする形で『三体』が改めて高い評価と人気を得ることになり、中国でも政府がSFを推奨するという事態になる。

SFというものは元来政府とは相性のよくないものというイメージがあり、それは『1984』のようなディストピアSFが脳裏にあるからだと思う。しかしソ連や中国の言論統制や思想統制のあった時代のSFは、未来が科学によって輝かしい発展を遂げているというユートピアSFが中心になっていた。翻って現在の中国でのSFブームはどうかというと、ディストピアも描かれているし、社会問題に焦点を絞ったものもかなり書かれている。つまり中国のSFは、今や国内向け発揚作品ではなく、世界を意識した、中国文化を伝え

る有効な手段として、その価値を認められているのだともいうことができよう。

そういった風潮の中、中国SFが再度、ヒューゴー賞を獲得した。それが郝景芳の『折りたたみ北京』である。この作品もまたケン・リュウによる翻訳である（聞いたところによると中国人SF作家からのケン・リュウへの翻訳のオファーは非常に多く、すでに全ての依頼に応えることができない状態になっているらしい。そのことからケン・リュウは次世代の翻訳家の育成にも着手しており、若手による翻訳を指導しているとのこと。まさに八面六臂の活躍としか言いようがない）。この『折りたたみ北京』もまた『三体』と同様、中国社会や中国の文化が濃厚に表れている作品である。ケン・リュウが翻訳して高い評価を受けた作品というのは、どれも中国文化の要素が強いものだという印象を受ける。これは英語圏の読者が中国SFにシノワリズムを求めているという、そこにエキゾチックな魅力を感じ、英語圏にはない世界観を好意的に受け止めているという傾向を示しているのかもしれない。郝景芳の作品では他に「看不见的星球」、「孤单病房」がケン・リュウによって翻訳されている。この「看不见的星球」は中国SFアンソロジー集のタイトルになっている（『折りたたみ北京 現代中国SFアンソロジー』早川書房・二〇一八年。早川書房で出版された際には、雑誌に

掲載された「折りたたみ北京」が日本の星雲賞を受賞したこともあり、タイトルがこちらに変更されている。

郝景芳については『郝景芳短編集』のあとがきに詳しいので割愛するが、物理、天体物理、経済、と様々な理系・文系双方の分野を専門的に学び、小説にも仕事にもそれらを生かして活躍している。彼女が特に力を入れているのが貧困地区の子どもたちへの教育である。これらの活動を通じて、彼女自身が体感した貧富の差、教育の重要性などが「折りたたみ北京」にも反映されているのだろう。彼女自身は「中国の社会問題を描くというよりも、世界的な、普遍的な社会問題を描いています」（二〇一七年二月、東京）と答えているし、ケン・リュウもアンソロジー集『看不見的星球』の序文で、政治的な観点から読み解くことへの注意喚起を行なっている。ある意味で、これは作り手側のメッセージであり、「我々は政府や政治に対する反抗はしていません」というプロバガンダでもある。しかし実際に作品に目を通す読者がどう感じるかは、まさに「自由」なのである。そういった意味では、日本人読者の多くが中国SFに政治的な意図を読み取ろうとする傾向があり、――これはおそらく世界的にも同様なのだろうが――、郝景芳の作品の多くはまさにそういった読み方のできるものが多い。

SFは元来社会や文化と切り離すことのできないジャンルではあるが、同時に科学知識も非常に重要な要素である。郝景芳作品の素晴らしいところは、そのどちらをも兼ね備えている点にある。ガジェットばかりが目立って思想的な骨格が弱いとか、逆に社会的な面ばかりが重視されて科学的なアイデアが弱いとか、そういう欠点が少ない。全体として非常にバランスのとれた作品ばかりである。ヒューゴー賞を受賞した「北京 折りたたみの都市」は、三層に分かれた都市が文字通り、時間によって折りたたまれ、それぞれ三つの身分階層に分かれている。主人公の貧しくても前向きな、しかし諦めを知っている朴訥な善意は、我々に中国の多くの「老百姓」（一般の人々）を想起させるし、中間層のエリートに手が届かない若者たちの日常は今の若者群像を、上級階級の実務側にいる人々の裕福ではあるが緊張を強いられた生活は現代のエリートや官僚たちの生活を思い起こさせられる。しかしこれがSFである所以は、やはり都市を文字通り折りたたむという奇想にある。壮大な空想物語を見事な説得力と視覚的に訴える表現で、読者を納得させてしまう点にあるのだろう。

しかしアイデアというのなら、本書に収められた二編「弦の調べ」と「繁華を慕って」が飛び抜けている。個人的にはこの二編があまりにも突出していて、正直なところ「北京 折

りたたみの都市」よりもずっとインパクトが強い。この二編は夫婦それぞれの視点から同じ出来事を記した一対の物語で、互いに互いの抱える苦悩や秘密を知らぬ二人がそれぞれの心境を語る物語である。地球は宇宙人である「鋼鉄人」の攻撃を受ける。鋼鉄人はピンポイントで重要な司令部などを攻撃し、地球の司令塔となるべき人物や組織は次々と壊滅していく。しかし不思議なことに彼らは芸術に対して特別な考えがあるらしく、音楽など芸術の公演をしているところは攻撃されなかった。古い都市も同様である。したがって地球人類は生き延びるために、彼らの攻撃を防ぐために、各地で芸術公演をし続けることになった。当然、職業として子どもたちが目指すのも芸術家である。主人公は音楽家の夫婦である。「弦の調べ」は夫が語り手で、どうやら月を本拠地としているらしい鋼鉄人に対して一泡吹かせてやろう、という音楽を用いた壮大な攻撃計画に参加することになる。この驚くべき発想と強烈な反骨心を持つ計画の中心者は「林先生」。特徴的なのはこの人物が決して目立った存在でも、誰もが憧れるヒーローでもない点にある。

林先生は抵抗者だった。なぜ彼だったのかはわからない。侵攻前にこの日が来ることを想像したとして、誰が抵抗者

となるかを考えたら、百人の名前を挙げたとしても林先生とは思えばないだろう。音楽教師にすぎないし、定年を控えたごく普通の指揮科の教員で、性格は控えめで、どんな政治運動にもデモにも参加したことはなかった。(六六ページ)

そう、郝景芳の作品に出てくる人物は誰もが平凡かもしれない。才能があってもけして順風満帆な人生を送っているわけではない。泥臭いほどに人間的で、非常に現実味を帯びている。本作でも驚くべき攻撃方法を編み出し、計画を実行する林先生はどう見ても平凡なただの一市民にすぎない。その彼も、主人公も、そしてともに戦う人々もごく普通の人々なのである。英雄物語でない市井の物語であることが、郝景芳作品の強みではないだろうか。

月に対して攻撃を仕掛ける。それもたった一度きりの大攻撃である。音楽を演奏し、宇宙エレベーターを振動させ、巨大な弦となって、振動を与えて月を破壊する。ただし地球で演奏している場所にも大地震が生じる。生き残る可能性は限りなく低い。

乾坤一擲の勝負で弦を震わせて天地の哀歌を響かせ、死

なばもろともの方法でいくばくかの自由をあがなう。反抗が絶望に達しての最後の反抗だ。(七六ページ)

物理学者の協力も得て、主人公は世界各地の音楽家たちとコンタクトをとり、この計画に賛同する仲間を集める。その中には長く別居生活をしていた妻の姿もあった……。

宇宙エレベーターを弦にして、音楽で振動を起こして、その波を月へ送る。

なんとというアイデア。SFとしても設定をおろそかにせず、物理学者による説明も加えているところが、また痺いところに手が届く親切さである。最終的にどうなるかはぜひ本書を読んでいただくとして、この視覚的にも聴覚的にも素晴らしい作品を全感覚で味わってもらえればと思う。「繁華を慕って」は才能があるのになかなか芽を出すことができず苦悩する妻の立場から描かれている。ここでは鋼鉄人の意外な秘密が明らかになると同時に、多くの優秀な地球人が鋼鉄人の勧誘を受け入れて彼らの仲間として働き、栄華を得ている実情がリアルに展開する。成功するために彼女は鋼鉄人の申し出を受け入れるが……やがて夫から月破壊計画を聞かされ、彼女は初めて自分の居場所を得ることができるのだった。

SFとしても楽しめるが、夫婦の奏でる愛情が伝わってくるしみじみとした切ない物語としても十分に読み応えがある。

郝景芳のSF作品が世界的に評価を得た理由というのは、SF的発想だけではなく、こうした普通の人々の心情を細やかに描き、社会の抱える問題を鋭く見つめる、そういったバランスのとれた視点があるからこそではないだろうか。

SF以外の作品の評価も非常に高く、今後もぜひ書き続けていってほしい作家の一人である。

(たちはら・とうや 作家・中華SF愛好家)